

「どだい、ジイツとして居られまへん、早う櫻の宮へ行て刀が抜き度うて、定はん衣裳は如何なりました」

「チャンと借つて有ます、少々高價が宜いのを借つて來ましたので、松さん、貴郎其處に黒羽二重の五ツ紋附、白獻上の袴割介み、紺足袋に緒太の草履、朱鞘の大小落しに差して貰ひます、印籠を腰へ提げて、松さん刀を見なはれ、宜う光つてますやろ、率と言ふまで抜きなはんや、鬘は百日だす、深編笠、宜う似合ひますせ、寅さんと喜いさん、淺黄甲斐絹の黒餅、白の手甲脚絆、草鞋履き、笈摺背中に西國三拾三所願拜、同行二人と書いて、頭は弾き茶筌、喜いさんは弟やで前髪だす、仕込杖、然し松さんの敵持と願禮と一緒に行く譯にいきまへんで、松さんは、難波橋を北エ突當り寺町を東エ源八の渡しを越へて櫻の宮へ、寅さんと喜いさんは松屋町を北エ天神橋の南詰東エ八軒家を通つて土手下から、京橋を東へ越へ、備前嶋橋を東へ網嶋を通つて櫻の宮へ、土手下邊りで待てとくなはれ、私はすぐに行きます、一足お先へ行とくなアレ」

「そんなら定はん、早う來とくなアレや」

と皆は出て行きました、定はんは、鼠甲斐絹の着附に、鼠手甲脚絆、鼠の帶、草鞋履き、頭は虫入りの弾き茶筌、天蓋と言ふ油糟の様な笠、笈櫃に金剛杖、前には鉦、手には鈴、チャンチャン、チャンチリン、願我身淨如香爐、と天神橋の南詰まで参りますと、此定はんに一人叔父さんが有り

まして高津新地に住んで居ます、天満へ用事に行た歸りがけ、天神橋の南詰で、べつたり逢いました、此叔父さん至つて耳が遠い、定はんの衣裳が立派なんで目につきました。

「フヘー、其處へ行くのは定やないか」

「ア、甚い人に逢ふた、へエ叔父さんですか、今日は」

「フヘー、見れば變つた——、へー形容をして、廻國するの、フヘー氣に要らん事があるなら氣に要らんと、フヘー私に話をして呉れたら宜いがな、フヘー嫁が心配するぢやないか」

「正眞やと思ふてる、叔父さん違ふ、今日は稽古屋の連中が、櫻の宮へ花見の趣向や」

「フヘー なんか言ふてるが、フヘー私は耳が聞こへん、兎に角私の宅までおいで」

「難儀やなア、是れは洒落や」

「フエーなんや」

「洒落や」

「言ふ事が有るなら、宅へ來て婆どんに言ふとくれ」

「コラ困つたなア、違ふと言ふのに、ど聲」

「フヘー」

「ど聲と言ふね」